

憐れな機械の夢の続き

It—dash

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。

シヤドウベースのモノとユリウスのやり取りが好きすぎて書きました

駄文ですがよろしくお願ひします

キャラ崩壊があるかもしれません、なるべく原作を意識して書いております。

憐れな機械の夢の続き

目

次

1

憐れな機械の夢の続き

「全く、だから来るなと言つたのだ」

「これも運命さ、甘んじて受け入れようじゃないか」

そう言つて野原に横たわるモノ、その顔は、自分が今にも機能停止しそうだと言うのに涼しいものだ。

その横に立つユリアスはあの日のことを思い出していた。

『1年前』

彼は数々の闘争を経ても満足することはなかつた。

昂ることもあつた、楽しめる戦いもあつた。だが、

高揚こそそれど、満たされることはなかつた。

だからなのかも知れない、彼は気まぐれを起こした。いつかの機械の国、あそこに行つてみよう、と、

ヴァンパイア故に大した苦労をすることもなくその国には辿り着いた。

「おや、久しぶりだね、憐れな吸血鬼じゃないか」

全く、これはついているのかいないのか、まさか1人目からこいつに出会うとはな。

「あの時に壊れると思つていたのだが、随分と長生きなものだな?」

「まあね、私もまさかここまで生きれるとは思わなかつたよ、君たちのおかげだ」

「私は好きにしただけだ」

「相変わらずだね君は、ところで、こんな所に何の用かな? 今は君の求めるような闘争はここには無いだろう?」

「そうだ、私はなぜここに足を運んだのだろうか、

「・・・・・フン」

「全く、その分では私とのやり取りも忘れているのだろうな。悲しいものだな」

「私を何だと思っているのだ、そんな些細なやり取り長い年月を生きる私が一々覚えてるはずないだろう。

「相変わらずなやつだ、私は約束を果たしに来てくれたのかとドキド

キしたと言ったのに」

「表情一つ変えないやつのセリフとは思えんがね」

「本当さ、よくみてくれ、ほら、頬か緩んでらんだろう？」

「くだらん」

そんな変化、気づくわけないだろうに、しかし、

約束か、……知らんな

「本当に忘れてるようだなあ、それでは紳士とは言えないな？」

「……」

「全く、仕方が無いな、教えてあげよう、

私は君にこう言つたんだ、『私は君のことが

好きなんだよ、いつかまた会えた時は、その時は……』

そうか、その時はくだらん戯言だと、一蹴し、氣にも止めなかつた
ものだが、なるほど、本気だつたと言うわけか。

「憐れだな、またあるかもわからないと言うのにそんなことを言うと
わな」

「勿論、後悔をしたこともあつたさ、だかな、ユリアス、だからこそ私は今日も生きてる、そう思うんだよ、勿論、テトラやエンネア達も私を大事してくれている、だが、何よりも生きたいと思えたのはユリアス・フォルモンド 君にもう一度会いたいと思つたからさ。」「フン、やはり憐れだな」

「お互い様と言つやつさ、フフツ」